コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年12月23日

1. BMJ:中国は、ゼロコロナからウイズコロナへの政策転換にあたり、香港とシンガポールの経験から学んだのか？
2. 定点観測インフルエンザ発生状況

【松崎雑感】

日本政治では「丁寧に説明する」ことが、「丁寧に説明するなんて、まっぴらだ」との同義語になっています。情けない限りです。BMJは、コロナ対策では、科学的に考えられた政策転換について、「丁寧に説明」して、ウイズコロナに移行しつつあるシンガポールの経験を香港との対比で紹介して、なかなか有益な内容となっています。日本は、早い時期から、当初からウイズコロナでやってきました。その結果、感染率、死亡率で世界の上位への不名誉な「ランクアップ」が実現しているようです。

松崎道幸　道北勤医協ながやま医院　matsuzaki-m@dohoku-kinikyo.or.jp

中国は、ゼロコロナからウイズコロナへの政策転換にあたり、香港とシンガポールの経験から学んだのか？

Owens D, Parry J. Covid-19: What can China learn from Hong Kong and Singapore about exiting zero covid?. *BMJ*. 2022;379:o3043. Published 2022 Dec 21. doi:10.1136/bmj.o3043

中国のゼロコロナ戦略は、コロナパンデミックの初期には、国民を感染から守る事に成功した。しかし、行動制限を強いられた人々が多数亡くなったウルムチの火災や、ほとんどマスクを着用していないワールドカップ観客の映像を見た市民は北京や上海で大きな抗議活動を行った。

中国政府は、これらを受けて多くの行動制限を解除することを決めた。これにあたり、中国政府は、ウイズコロナへの転換にあたって、香港やシンガポールの経験から何を学んだのか？

ワクチンが実用化される前には、感染防止対策が最も有効な戦略だった。香港では、ワクチン接種が始まるまでは、検査、追跡、隔離を対策の基本とした結果、740万人の市民における新型コロナ死亡率を100万人あたり26人に抑えていた。その結果、香港市民の新型コロナ死亡率はイギリスの68分の1となっていた。

ワクチン接種が可能となってからは、感染弱者を優先して、順次全市民に接種を勧めることが最も適切な対策となった。2021年初めまでに、効率の良い接種センター方式により、香港のワクチン接種率が極めて高くなった。

しかし、2022年にオミクロン株が流行を始めた時点で、80才以上の人々のワクチン完了率（2回接種）は23%に留まっていた。

高齢のワクチン未接種の人々に対してオミクロン株は猛威を振るい、2022年初めに香港の新型コロナ死亡率は世界最悪となった。

シンガポールはどうだったか？パンデミック当初は香港もシンガポールも同様の感染防止対策を実施していた。ワクチン接種もいち早く開始された。

シンガポールは高齢者と感染弱者にmRNAワクチンを優先的に接種した。接種勧奨対策もしっかり進められた。つまり、今後6～12か月以内に徐々にゼロコロナからウイズコロナに移行する予定であり、それまでにしっかりワクチン接種をするよう呼び掛けたわけである。

シンガポールでは現在大半の行動制限は解除されており、100万人あたりのコロナ死亡率は303人で、現在もソーシャル・ディスタンシング対策を実施している香港の1463人を大きく下回っている。

香港のコロナ死亡率が高い理由は、第一に、感染弱者へのワクチン接種率が低かったこと、第二に、医療システムに大きな負荷がかかった事である。

いずれも、本土政府の意向を忖度するという政治的思惑を優先して、国境管理の強化と行動制限を行う一方、ワクチン接種を軽視したという、科学的知見に反する政策を行った結果である。

シンガポールが市民に対して、ウイズコロナへの移行の具体的プランを提示したのに対して、香港当局は行動制限対策の継続を市民に通知するだけだった。

香港の高齢市民には、欧米の医学や医薬品、つまりワクチンに対する抵抗感が強い。ただし、ワクチン接種率が低いのは、ワクチンの効果を実感させる働きかけが少ないためと考えられる。

厳格な行動制限とマスク着用を実行するなら、ワクチン接種などなくてもコロナを防ぐことができるという観念が広まっていた。

10数億の中国の人々に対して、都市部では医療システムが急速に整備されている。しかし必要なレベルに見合っているかどうかは不明である。

農村部では、医療資源の不足が著明であろう。

このため、新型コロナ流行が急増した場合に、医療崩壊とならないかどうかが憂慮される。したがって、ワクチン接種率が十分高くなり、抗ウイルス薬が十分供給できるようになり、医療システムが抜本的に増強されるまでは、厳しい行動制限を続ける必要がある。

中国は全土で、ITによる濃厚接触者追跡を基礎と下検査、追跡、隔離対策を徹底し、感染者が発見された場合、すぐに大規模なロックダウンを行ってきた。最近のデータでは、80歳以上の高齢者の76.6%が国産ワクチン（不活化ワクチン）の2回接種を完了しており、65.8%は3回接種完了となっている。

香港における調査では、このワクチンを3回受けると、重症化と死亡リスクを98%以上低下させることが分かっている。つい最近も、中国当局は「ダイナミックゼロコロナ」戦略は長期間続けること、そしてウイズコロナへの脱出戦略ではないと明言している。

行動制限を主体とした感染防止対策を維持するという事は、感染弱者のワクチン接種率が高くなっても、「ダイナミックコロナ戦略」を維持するという点では、シンガポールよりも、香港の対策に近い立場をとっていることになる。

高齢の人々がワクチン接種によって集団免疫を形成して、大流行が防がれるレベルに到達するには時間がかかる。

PCR検査陽性率といくつかの大都市からの報告を見ると、中国の感染者数はすでに急速に増えてしまっており、医療機関を非常に圧迫していることがわかる。

ゼロコロナ戦略を急に中止すると、人々に誤ったメッセージを送る事となる。最も懸念されることは、現在継続中の感染防止対策を適切に緩和する道筋が提示されていないことである。

2022年初めのBA2流行時に、香港ではマスク着用とソーシャル・ディスタンシングが継続されていたため、感染数の倍化時間が3.1日と、世界平均の2日より長くなっていた。この状況でも、香港の医療システムは崩壊していた。もし、これらの感染防止対策がなければ、死亡者はずっと多くなっていただろう。

パンデミック中に世界各地で実施されたコロナ対策から、多くの教訓を学ぶことができる。香港とシンガポールのコロナ死亡率に差があるのは、ゼロコロナからの脱出戦略の有無によるものだ。シンガポールの教訓は、ゼロコロナからウイズコロナに転換する条件として、ワクチン接種率が十分高くなっていること、そして、時間をかけて戦略転換をすることを市民に丁寧に説明することである。香港では、そのような熟慮された脱出戦略がなかったために、多くの人々の命が奪われたのである。

【日本の定点あたりインフルエンザ報告数：2022年厚労省データ】

徐々に報告数が増えていますが、ちなみに、コロナパンデミック直前の2019年第50週の報告数は77425名でした。今年も今のところ2019年の30分の1近くの発生率にとどまっています。

元旦からの週数	総報告数	昨年同期
50（12月12日の週）	2592	37
49	1238	35
48	636	30
47	535	27
46	546	19
45	407	28
44	270	23
43	153	20
42	106	13
41	97	10
40	68	10
39	51	5
38	78	3